

## J・A・コメンスキー

### プラハの教育博物館を訪ねて

大梶 優子



プラハ市の中心を流れるヴルタヴァ（モルダウ）川と、丘の上のプラハ城の間に、マラー・ストラナと呼ばれる地域がある。官庁・大使館が多く並ぶ古い町並である。ロマネスク・ゴシック・ルネッサンス・バロック・ロココと、十世紀頃からの建築様式がそろうて、建築物博物館街の様を見せている。

教育博物館は、そのマフラー・ストラナ地区のヴァルトシュテイン宮殿の一隅にある。「コメンスキー教育博物館」という看板が、小さく掲げている。前もってその存在を知らなければ、訪ねあてることができないような場所である。

昔は、馬車が通ったであろうと思われるような、アーチ形の門をぬけて、二つ目の中庭に出ると、似たようないくつかの質素な扉がならんでいる。その一つが、教育博物館の玄関である。

館内は、受付を境にして、右半分が、J・A・コメンスキーの資料展示、左半分が、現在の教育活動の展示会場になっている。

コメンスキーの全身像が、展示場の正面に立ち、壁面に沿って、ガラスケースがならぶ。窓も高く、天井も高く、コメンスキーと向きあって、別世界に入り込むような雰囲気漂わせている。

ヤン・アモス・コメンスキー (Jan Amos Komensky) は、日本では、ラテン語名のコメニウス (Comenius) で知られている。十七世紀の、ヨーロッパ教育史上最初の教育思想家、世界最初の絵入り教科書「世界図絵 オルビス ピクトス」の著作者である。

コメンスキーは、チェコスロヴァキアの中中部、モラヴィア地方で生まれ育った、「チェコの人」である。私が、プラハに来てまもない頃の訪問先で、「コメンスキー」と、私の知る「コメニウス」が同一人物であることに気づくまで、ちょっとした時間がかかったのをおぼえている。教育活動を仕事にしているチェコの人々の間で、コメンスキーが、チェコ人として尊敬されているのを知った。「世界の教育学の師コメニウス」は、チェコの人々にとって、何よりもまず「民族の師、チェコ民族の指導者」なのである。

「民族の師」という敬称は、もともと、当時のコメンスキーの教育思想家としての活躍と共に生まれ、今日にうけつがれたのではない。十九世紀になって、長年のハ

プスブルグ家の支配から立ちあがり、チェコ民族としての自覚の上に展開する民族復興運動の中でよみがえり、新たな評価がなされるまで、葬り去られていたらしい。

この国の歴史の中で、コメンスキーは、暗国時代と呼ばれる時期の、まさにその「暗」の部分を生きた人である。政治上、宗教上の理由から、一生の大半を異国での亡命生活ですごしている。また、国外追放になる以前も、七年間チェコの北部で遊行を続けた。だから、小さな町の古い家々の壁に、コメンスキー滞在の時期を記した銅板を見いだす時、他の著名人のそれとは、ずい分違う意味をもつことに気づく必要がある。

コメンスキーの亡命は、個人的なさすらい人としてではないようだ。同胞教団のメンバーを率いての、集団亡命の指導者である。同胞教団は、十五世紀に、ローマ教会に対して、世界に先がけて宗教改革を行ったヤン・フスの教えにもとづく新教派の名である。ヤン・フスが、当時の慣習から脱して、ラテン語ではなく、自分達の言葉であるチェコ語で説教をしていたというベツレヘム教

会が、今でもブラハの旧市に残っている。コメンスキーがブラハに立ち寄ったのは、生涯に一回だけということになっているが、その時に、このベツレヘム教会を訪れたそうだと。

コメンスキーは、まずは宗教者であり、宗教集団の指導者であった。その宗教の教えが、チェコ民族全体を基盤とするものであったから、コメンスキーの思想と行動は、常に自らを含む民族の変革に向けられた。

チェコスロヴァキアに任んで、身近に知り得たコメンスキー像は、このような民族指導者の姿を浮き彫りにしている。「民族の師」、それから、世界に知られる「教育の師」なのである。

博物館の全身像を前にして、コメンスキーの人間として生涯、ヨーロッパ全体を見渡すことなしには理解し得ないその時代背景が、頭をよぎっていく。展示されている資料は、コメンスキーの移り住んだ土地、年代を明示しながら、執筆草稿や著書表紙のコピーが主になっている。点の集まりのような資料の間を、「民族の師」「教育

の師」としてのコメンスキーの考えや行動でつないでみたい。

ヤン・アモス・コメンスキーは、一五九二年三月二十八日に、東モラヴィアの町で生まれた。その町が、ウヘルスキーブロードともニヴニツェともいわれているが、はつきりしない。

少年時代に両親を失い、おばの家に預けられるが、町の戦火に会い、ニヴニツェへ逃げ、同胞教団にひきとられている。十六歳で、中央モラヴィアにあるプシエロフのラテン語学校に入学する。同胞教団が組織し、ラテン語学習を中心に、将来は、教会での仕事を担えるための教育をおこなう学校であった。

一六一一年に、同胞教団の推薦をうけて、ドイツのヘルポルトとハイデルベルグに留学した。そこで、世界の動きや新しい学問の方向をとらえる機会を得た。チェコ語の辞書作成の発想、モラヴィア地方の自筆地図作成、ポーランドの天文学者コペルニクスの地動説との出会い

などである。この留学時代に、思想体系汎知学の構想、教育活動への志向が生まれたといわれる。

一六一四年にモラヴィアに戻り、プシエロフのラテン語学校教師になった。教育改革の手始めとして、ラテン語教科書作成にとりかかった。

一六一八年、北モラヴィアの町フルネクの教会執事に赴任した。その年に、三十年戦争が始まり、一六二〇年に、ブラハ近郊で同胞教団を中心とする軍が、ローマ教会側のハプスブルグ家の国王軍に敗れた。これが、白山の戦いであり、チェコの暗黒時代の始まりにもなるのである。同胞団の町フルネクは戦火に会い、コメンスキーも家を焼かれ、町をのがれるが、それは同時に、同胞団教徒としての逃亡をも意味した。庇護者の領地を移り住みながら執筆活動を続けた。

一六二八年、チェコ領土を支配していたオーストリア国王兼神聖ローマ帝国皇帝が、新教徒の国外退去の令を出し、コメンスキーは、同胞教団の人々と共に、ポーランドのレシヌノに亡命する。これ以後四十二年間、生涯

の終わりまで、亡命生活が続くのである。生涯を通じて、祖国の独立を願い、同胞教団の保護を求めての動きが最優先されている。

レシヌノでは、高等学校（ギムナジウム）の教育改革者として迎えられ、「大教授学」「母親学校の指針」「開かれた言語の扉」などの書物が完成した。コメンスキーの教育構想は、祖国の全子弟の教育を念頭においてつくられている。十九世紀半ばになるまで出版されることがなかったにもかかわらず、チェコ語で書かれた「教授学」の前書きで、「私は、自分の民族の言葉で書く。なぜなら、私の民族のために書くのだから。」と述べている。

コメンスキーの教育改革論は、他国でも知られるところとなり、一六四一年には、ロンドンに行っている。また、スウェーデンからは、教科書作成を依頼されている。

一六四七年に、三十年戦争が、スウェーデンの勝利で終結する。しかし、コメンスキーの望んだ祖国の独立は

実現しなかった。その状況で、「瀕死の母、同胞教団の遺言」をチェコ語で書き、母国語による教育を深め、民族の伝統を発展させること、青少年の教育に努力し、民族の独立を志向することの課題を強調している。

一六五〇年には、ハンガリー北部のシャロスバタクでの学校改革を指導している。四年間の滞在で、「世界図絵」「幸福な民族」を著作し、学習を演劇化する方法をとり入れて発展させた。「世界図絵」は、ハンガリー語を母国語とする学生達の教育に、絵を媒体とする学習方法を採用する発想から生まれたものである。

一六五四年に、再びレシュノに戻った。三年後におこったポーランド対スウェーデン戦争で戦火に会い、財産、書物、原稿を失った。

一六五八年、六十六才のコメンスキーは、デ・ヘール家の招きでアムステルダムに移り住んだ。全集出版のあと、主な関心は人類の平和に向けられ、「平和の天使」を書いた。

一六七〇年十一月十五日、アムステルダムで死去、亡

命者として、ナールデンという町の新教派の教会に葬られた。

一八七〇年、コメンスキーの没後二百年記念に際し、チェコの教育関係者がオランダの文部省に、埋葬確認の要請をした。当時は、すべて不明になっていて、オランダ側からの返答は、一九二七年になってからだそうだった。その後、このナールデルンの教会は、コメンスキーゆかりの地として改築された。

博物館の展示資料は、チェコ民族がコメンスキーとのかかわりで、自ら行動をおこした証しを、大きなパネル写真で写し出して終わっている。

「いかがでしたか。」と、受付の老婦人が近づいて、コメンスキーの個人生活、子孫とチェコとのかかわりなどを話し始める。教育論汎知学を含めて、コメンスキー研究が世界に広がっていても、チェコの人々が共感するコメンスキーの考えや行動の次元は、やはり違うようだという思いで、博物館を後にした。

(チェコスロヴァキア在住)